藤沢市藤澤浮世絵館　開館1周年記念

公益社団法人
川崎・砂子の里資料館コレクション魅惑の世界

2017年9月　Vol.4
浮世絵館だより特別号

江の島と名品浮世絵展

もくじ

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P2
藤沢市長　鈴木恒夫
藤沢市教育委員会 教育長　平岩多恵子
「江の島と名品浮世絵展」に寄せて・・・ P3
公益社団法人　川崎・砂子の里資料館 館長
神奈川県観光協会会長　斎藤文夫氏

1周年記念の「ココに注目！」
広重の東海道作品を見比べ・・・・・・・・・・・・・・ P4
江の島浮世絵大集結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P5
名品に見る浮世絵のながれ・・・・・・・・・・・・・・ P6
「ふるさとの記憶」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P7
公益社団法人　川崎・砂子の里資料館 理事　小池満紀子氏

藤沢市
藤澤浮世絵館
FUJISAWA UKIYO-E MUSEUM

ごあいさつ

藤沢市藤澤浮世絵館は、郷土への愛着を育むとともに、地域文化の向上に寄与する目的として、2016年（平成28年）７月に開館し、このたび１周年を迎えました。開館以来、会期ごとにテーマを設けた展示を行い、浮世絵に親しみながら、藤沢市の歴史文化に触れていただいております。

今回の、開館１周年記念「江の島と名品浮世絵展」は、公益社団法人川崎・砂子の里資料館のコレクションをお借りして行う記念展です。藤沢に関連した浮世絵のほかにも、浮世絵の歴史を彩る優れた作品をご覧いただける大変貴重な機会となりました。多くの方々に藤沢の浮世絵を始めとして、より深く浮世絵の魅力を感じていただける内容となっております。

「郷土愛あふれる藤沢」目指す都市像として掲げたこの言葉には、先人の積み上げてきた歴史や伝統を大切にし、まちへの愛着とともに、市民各々が日々を生き生きと暮らす、そのようなイメージが込められています。郷土愛が結ぶ人の和は、将来の藤沢市を築くためにも大きな力となります。

浮世絵を通じて郷土を知る、との着想から誕生した藤澤浮世絵館は、１周年を経て、期待を上回る多数のご来場をいただいております。ここから生まれる人の和もまた年を重ねて大きく拡がり、郷土の歴史を未来へと繋ぐ架け橋となるでしょう。

今回の記念展では公益社団法人川崎・砂子の里資料館より貴重な資料をご貸与いただきました。あらためまして心より感謝申しあげます。今後とも関係各位のご理解ご協力を賜りながら趣向を凝らした展示に努め、多くの皆様方にご来訪いただけるよう取り組んでまいります。藤澤浮世絵館のこれからの催しにも、ぜひご期待ください。

２０１７年（平成２９年）９月
藤沢市長　鈴木恒夫

ごあいさつ

藤澤浮世絵館が、開館１周年を迎えました。この間、多くの方にご来館いただき、藤沢市が所蔵する浮世絵を中心とした郷土資料の展示ならびに講座やワークショップを楽しんでいただいております。

藤沢市では市制40周年の1980年に、日本大学の元総長であった呉文炳（くれふみあき）先生から江ノ島浮世絵コレクション等を譲り受けたことを機に、郷土の歴史資料の一環として、藤沢宿、江の島を題材とした浮世絵や関連する資料を収集してきました。所蔵する浮世絵は、地域に根ざした作品コレクションを中心に、関連資料と合わせますと約1500点にのぼります。

今回、開館１周年を記念して、公益社団法人川崎・砂子の里資料館から資料をお借りし、藤澤浮世絵館の資料を交え、江の島の風景、風物が描かれた浮世絵を中心に、浮世絵の歴史を代表する絵師たちの作品の数々を展示する企画を催します。藤沢にゆかりのある作品や、浮世絵の歴史を通じて、より藤沢の歴史文化や浮世絵の魅力について楽しんでいただけると思っています。

また、本展が、藤沢市と同じく東海道の宿場町として発展してきた、川崎市にある川崎・砂子の里資料館の作品であることは、宿場文化を通じて新たな交流を生み出していく機会になると感じています。

最後になりましたが、本展にご協力を賜りました公益社団法人川崎・砂子の里資料館様ならびに、多大なご協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

２０１７年（平成２９年）９月
藤沢市教育委員会
教育長　平岩多恵子

藤沢市藤澤浮世絵館　開館1周年記念

「江の島と名品浮世絵展」に寄せて

公益社団法人川崎・砂子の里資料館 館長
神奈川県観光協会会長　斎藤文夫

藤澤浮世絵館の開館１周年をお慶び申し上げますと共に、この１年間、数々の企画展を拝見いたし、「日本民族の誇り」浮世絵芸術の殿堂として、着々と地歩を固めてこられましたことは、関係者皆様のご努力によるものと、心から敬意を表します。

神奈川県民の誇り名蹟「江の島」は、湘南の真珠と謳われ、古来多くの絵画が残されています。浮世絵にも数多く登場し、鎌倉七里ヶ浜から見る江の島、そして富士の構図は定番といわれる程、多くの絵師に描かれてきました。二世五姓田芳柳の「七里ヶ浜から江の嶌と富士❶」を、ご覧下さい。また藤沢市所蔵の名品に加え、小館所蔵の鳥居清長の一対の柱絵「江之嶋の渡し❷」「江之嶋の参道❸」は、貴重な作品であります。東海道五十三次コーナーでは、歌川広重の保永堂版東海道に次いで出版された隷書体の東海道五十三次❹、神奈川県内の宿駅を展示しています。見慣れた保永堂版とは一味違う、旅行く人の姿が描かれています。名品に見る浮世絵の流れの中では、浮世絵の元祖といわれる菱川師宣の墨摺絵❺は浮世絵初期（1690年代）の作品で、珍しいものです。漆絵・紅摺絵などの1700年代作品は、浮世絵の摺の進歩を知る上で重要な作品です。多色摺錦絵は鈴木春信の「風流やつし小野道風❻」（1760年代）からで、１枚16文（かけそば１杯16文）で売られていました。寛政時代（1790年代）、喜多川歌麿、鳥居清長、細田栄之の美人画絵師により、浮世絵黄金期が到来し、役者絵では勝川春章、歌川豊国などが活躍し、多くの門下を育てました。文政から安政（1830年頃）に、葛飾北斎・歌川広重により風景画という、浮世絵に新しいジャンルが加わりました。

広重の代表作の一つ、保永堂版「庄野　白雨❼」。また江戸名所百景の「亀戸梅屋舗❽」これはゴッホが油彩で描写した有名な作品であります。国貞（のち三代豊国）の珍しい歌舞伎車引き❾、国周の勧進帳❿、幕末の異才絵師国芳の猫の絵⓫も見どころであります。ご鑑賞有難うございました。

❶

❷

❸

❹

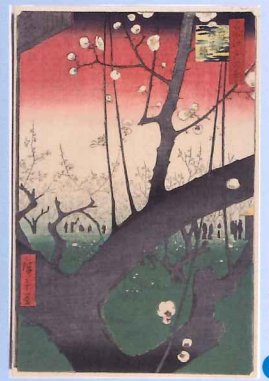
❻

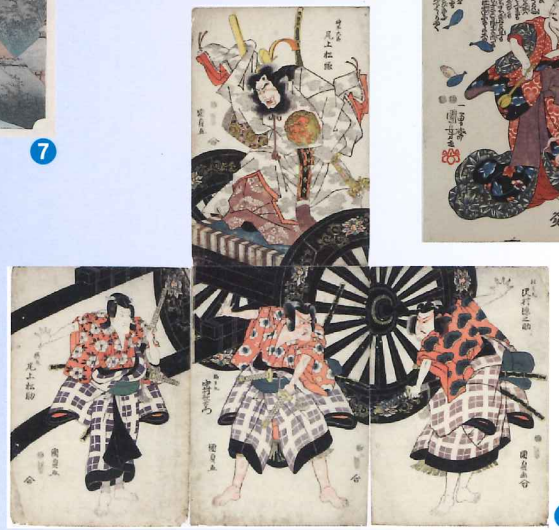
❺

❿

❼

⓫


❽


❾

砂・・・川崎・砂子の里資料館所蔵作品

広重の東海道作品を見比べ

「風景を描けば右に出るものなし!」という浮世絵師の初代歌川広重(1797-1858)は、生涯に20種類以上もの東海道五十三次を描いたシリーズ作品を残しました。

東海道五十三次コーナーでは、二つの東海道を描いた作品、通称「隷書東海道」と「竪絵東海道」の日本橋・神奈川の宿場が描かれた作品を展示します。二つの作品の描かれ方の違いをお楽しみください。

川崎

隷書東海道では六郷の渡しが描かれており、渡し舟に乗る旅人たちの話声が聞こえてきそうです。

竪絵東海道では、鶴見川とその河口付近の村であった生麦村ののどかな風景が描かれています。

砂 歌川広重「東海道 三 五十三次 川崎」(隷書東海道)

歌川広重「五十三次名所図会 三 川崎 鶴見川 生麦の里」(竪絵東海道)

保土ヶ谷

隷書東海道の保土ヶ谷宿は、帷子川と新町橋が、静けさを感じさせる雪景色で描かれています。

竪絵東海道には、宿場間の休憩所であった「境木の立場」の茶屋の様子が描かれており、画面奥には鎌倉の山をのぞみます。

砂 歌川広重「東海道 五 五十三次 程か谷」(隷書東海道)

歌川広重「五十三次名所図会 五 程か谷 境木立場 鎌倉山遠望」(竪絵東海道)

藤沢

隷書東海道の藤沢宿は、大鋸橋（現在の藤沢橋）付近の、宿場の夜の賑わいが描かれています。

竪絵では南湖の松原と、そこから見える左富士が描かれています。左富士は東海道中、南湖と吉原宿の二か所のみで見ることができる希少な風景でした。

歌川広重「東海道 七 五十三次 藤沢」(隷書東海道)

歌川広重「五十三次名所図会 七 藤沢 南期の松原 左リ不二」(竪絵東海道)

平塚

隷書東海道の平塚宿は、あぜ道を歩く旅人たちが描かれており、奥に見える小高い山は高麗山です。

竪絵では、馬入川の流れと舟渡しが描かれており、奥には中央に大山、左に富士と、雄大な山々がそびえています。

砂 歌川広重「東海道 八 五十三次 平塚」(隷書東海道)

歌川広重「五十三次名所図会 八 平塚 馬入川舟渡し 大山遠望」(竪絵東海道)

江の島浮世絵大集結

江戸時代における江の島は言わずと知れた一大参詣・観光の地。六年に一度の弁才天開帳の際には、多くの江戸っ子が江の島詣にやってきました。そんな江の島を描いた浮世絵は数知れず、また有名な絵師はこぞって江の島を題材とした作品を残しました。

藤沢宿・江の島コーナーは数多く描かれた江の島浮世絵作品の中でも、選りすぐりの逸品を集めました。江戸時代の江の島の様子をご覧ください。

江の島が浮世絵に登場する初期の作品です。江の島の高さが強調して描かれている点が特徴です。右下には引き潮の際にできる砂洲の通り道「洲鼻（すばな）」を通り、江の島へ向かう人々が見られます。

勝川春章
「相州江之島ノ風景腰越ノ方ヨリ見図」

北斎の代表作「冨嶽三十六景」の内の一枚。摺りには舶来の染料ベロ藍が用いられ、空や海に加え輪郭線も青色となっています。

島中央の三重塔は現存していませんが、鍼灸師の杉山検校（すぎやまけんぎょう）によって建立されたものと伝えられています。

葛飾北斎
「冨嶽三十六景　相州江の嶌」

砂 歌川広重「相州江之嶋入り口ノ図」

鳥居付近で、宿の者が旅人に声を掛ける様子が描かれています。江戸っ子たちは、本作のような「団扇絵（うちわえ）」を買い、自ら団扇に貼って楽しみました。

また、このような藍色の色調で摺られた浮世絵は「藍摺り（あいず）」と呼ばれます。

砂 鳥居清長
「江之嶋の参道」

砂 鳥居清長
「江之嶋の渡し」

「江之嶋の渡し」では江の島まで人足が若い女性を担いでいく様子が描かれています。

「江之嶋の参道」では、洲鼻を通って江の島へ向かう道中の様子。下の女性は脚絆（きゃはん）を結び直しています。

この様な、細長い浮世絵は「柱絵（はしらえ）」と呼ばれました。

江の島の浜辺に集う旅姿の人々が描かれています。

作者の鳥居清長は群像表現を得意とし、本作でも様々な仕草の人物が、バランスよく配置されている点が特筆されます。

背景には広々とした海と、量感のある江の島が迫力をもって描かれています。

砂 鳥居清長「江之嶋」

江の島詣の道中で、女性たちと地元の子どもが戯れる様子が描かれています。

荒い波の様子や、着物がはためく様子から、浜辺に吹く潮風の強さが伝わってくるようです。

一嶺斎芳雪「相州江之島詣春の賑」

名品に見る浮世絵のながれ

一口に「浮世絵」と言っても、描かれた題材は美人画・役者絵・名所絵等々と非常に多彩であり、作風も時代の変遷や流行に応じて豊かな変化を見せます。企画展示コーナーでは様々な時代の名品と共に、浮世絵が発展する様相を眺めます。

初期浮世絵

菱川師宣　「化粧　毛剃り」

女性も男性も、様々な人が髪や髭を整える様子がユーモラスに描れています。このような墨一色で摺られた浮世絵は「墨摺絵」と呼ばれ、浮世絵が一枚の絵として独立した際の、最初の摺り形式です。

鈴木春信
「風流やつし小野道風」

春信の時代から鮮やかな多色摺りが可能となり、「錦絵」が誕生しました。本作は書の達人である小野道風にまつわる逸話を主題とし、道風の姿を当世流の美人に置き換えて描いた作品です。

役者絵

歌川国貞（三代豊国）
「『菅原伝授手習鑑』より
車引」

珍しい形の四枚続である本作は若き日の、国貞の意欲作です。

ダイナミックな構図と役者の動きや表情から、当時の舞台の活気が伝わってくるようです。

豊原国周　「勧進帳　三舛」

歌舞伎演目『勧進帳』の弁慶を演じる九代目市川団十郎の相貌が画面いっぱいに描かれています。このように顔がクローズアップされた浮世絵は「大顔絵」と呼ばれ、作者の国周は大顔役者絵を得意としました。

美人絵

窪俊満
「中洲から深川を望む美人」

三人の女性と料亭内から望む深川の風景が配された作品です。俊満は狂歌界で活躍した絵師で、本作のような涼しげな色合いの美人画を得意としました。

江の島へ向かう道中の女性と、お付の若衆が描かれています。

歌麿は、人物の上半身を大きく描く「大首絵」を得意とし、美人絵師として人々の人気を得ました。

喜多川歌麿
「風流四季の遊　弥生の江之島詣」

歌川豊国「両国花火之図」

夏の花火を見るため両国橋に集まる人々が描かれています。群像表現が目を引きますが、美人が多く描かれていることから、美人画として制作されたことがうかがえる作品です。

武者絵

歌川国貞（三代豊国）「和藤内」

虎にまたがる武者は中国人を父に、日本人を母に持つ「和藤内」（後に国姓爺）で、鄭成功がモデルとなった人物です。

勇壮な武者を描いた武者絵は子どもや威勢のいい若者に人気の浮世絵でした。

戯画

鐘を突けば現世では大金を手にするが、来世で無間地獄におちるという「無間の鐘」がモチーフとなった戯画です。この絵では鐘は蛸に、小判は魚の干物に見立て描かれています。

歌川国芳
「流行猫の戯　梅が枝無間の真似」

動物

歌川広重「獅子の子落とし」

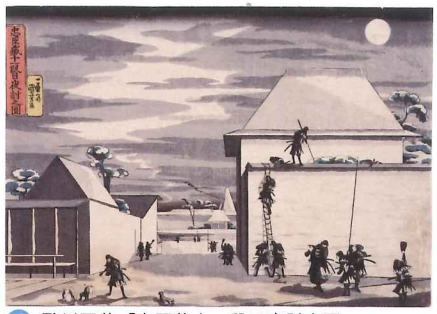
名所絵で有名な広重ですが、動植物を描いた作品も得意としました。

本作は、我が子を谷底に落とし、這い上がってきた子だけを育てるという獅子の逸話をモチーフとしています。

風景画（名所絵）

砂 葛飾北斎「新板浮絵忠臣蔵第十一段目」

忠臣蔵の物語のクライマックス高師直（こうのもろのう）（史実では吉良上野介）邸への討ち入りの場面。建物を描く線が急角度で画面中央に集まるように描き、遠近感を強調しています。このような作品は「浮絵」とよばれ、風景作品の元となりました。



砂 歌川国芳「忠臣蔵十一段目夜討之図」

こちらも討ち入りの場面で、義士たちが高師直邸に侵入する様子が描かれています。

本作の構図は海外の銅版画を参考にしており、陰影表現なども西洋からの影響が色濃くみられます。

砂 歌川広重「東海道五拾三次之内　庄野　白雨」

広重の代表作、通称「保永堂（ほえいどう）版東海道」の庄野を描いた作品です。降りしきる雨が薄墨で表現され、背景の木々のなびく様子や人物の動きから、吹く風の強さまで伝わってくる風景作品の傑作です。

亀戸にあった茶屋の梅屋舗（うめやしき）を描いた作品で、ゴッホが模写したことでも知られています。

広重晩年の作ですが、梅の幹を画面手前に大胆に配置する構図などから、衰えぬ創作意欲が伝わってくるようです。

砂 歌川広重「名所江戸百景　亀戸梅屋舗」

砂 二世五姓田芳柳「七里ヶ浜から江の嶌と富士」

二世五姓田芳柳（ごせだほうりゅう）は五姓田義松（よしまつ）門人で、写実的な表現を得意としました。

浮世絵の表現からは脱したリアルな描写ではありながら、江の島と富士山を共に望む七里ヶ浜からの眺めという主題は時代を経ても引き継がれていったようです。

ふるさとの記憶

公益社団法人　川崎・砂子の里資料館理事　小 池 満紀子

川崎・砂子の里資料館に収蔵されている、斎藤文夫コレクションの最大の特徴は、神奈川に縁のある浮世絵を豊富に揃えている点にあります。自宅が旧東海道の川崎宿にあることから、東海道を描いた揃物（シリーズ）をはじめ、多摩川、川崎大師、金沢八景、江の島、大山といった名所のみならず、曽我物語や小栗判官の物語など、ふるさとを舞台とした浮世絵が豊富に蒐集されています。斎藤は、長年にわたり一貫して神奈川の歴史や文化を広く伝えるために、この故郷を題材とした浮世絵を求め、さらに浮世絵の歴史を通観できるように裾野を広げてきました。

例えば東海道といえば、広重の〈東海道五拾三次之内〉通称「保永堂版東海道」が浮かびますが、実は広重が描いた東海道シリーズは二十種類以上あります。通称「行書東海道」や「隷書東海道」は、保永堂版とは異なった宿場の魅力を伝える作品で、「隷書東海道」などは残存数が少ない貴重なシリーズといえます。広重ばかりでなく、北斎や英泉、国貞も東海道を描きました。この頃は、民衆の間でおかげ参りと呼ばれる伊勢神宮への参詣が盛んになった時期であり、天保４年（1833）頃に出版された保永堂版の爆発的な大ヒットは、このような時代背景が起因していました。

参詣を目的とした旅が、人々の娯楽として一般的になったのは、町人文化の最盛期といわれる文化文政期（1804～1830）の頃からでしょうか。それ以前、清長や歌麿の作品では美人群像の背景として名所が描かれるにすぎませんでしたが、斎藤コレクションには、文化文政期に描かれた勝川派をはじめとする諸派の、特に江の島を題材とした作品が多く見られます。歌舞伎に取材したお軽勘平の道行き、歌舞音曲の弁才天を祀る江の島に詣でる美人、その背景に描かれた名所にも工夫が凝らされ、名所絵としての見どころが増してきます。

このように、浮世絵は庶民の生活感情に寄り添いながら、数々の作品を残してきました。当時の文化を知ることは、浮世絵の美意識を探るためには大変に意義のあることです。藤沢には、人々の心をとらえた江の島があり、時宗の総本山である遊行寺があります。時には、その場所に足を運び、ふるさとの歴史や文化に触れ、江戸っ子になった心持でふたたび浮世絵に目を向けて、楽しんでいただけたらと思います。

藤沢市藤澤浮世絵館１周年記念
川崎・砂子の里資料館コレクション魅惑の世界
江の島と名品浮世絵展

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館
資料提供：公益社団法人　川崎・砂子の里資料館
【住所】藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階
【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817
【URL】http://www.fujisawa-ukiyoekan.net/
【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）
【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）